

# 中外抄・富家語における希望表現について

柴田昭二  
連 仲友

## 目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

### 一、はじめに

本稿は、別稿<sup>①</sup>を受け、中外抄・富家語を研究資料として、それにおける希望表現<sup>②</sup>の実態を説明しようとするものである。中外抄・富家語は共に元関白藤原忠実の言談の記録であることが共通し、両者を本稿に扱う所以である。

『日本古典文学大辞典』<sup>③</sup>などによれば、中外抄の筆録者は、忠実の家司であった中原師元であり、富家語の筆録者は、没落後の忠実の近辺にあった高階仲行である。中外抄に筆録されたのは保元三年（一二三七年）から久寿元年（一一五四年）までの十八年間にわたり、富家語に筆録されたのは久安七年（一一五一年）から応保元年（一二六一年）までの言談

中外抄・富家語における希望表現について

である。内容は主として朝廷・摂関家における儀式や神仏事など多方面にわたる有職故実に関する事柄であるが、中外抄には政務に関係する話題が多く、富家語には衣食住などの一般的な事項に関する話題が多い。また中外抄の、漢文記録体を主として和文脈の浸透した平仮名及び片仮名による口語表現を数多く含む文体に対し富家語は、漢文の記録体を中心としながら片仮名による口語表現を交えた文体であるといえよう。テキストには、岩波書店新日本古典文学大系『中外抄』<sup>④</sup>『富家語』<sup>⑤</sup>（山根對助、池上洵一校注）を用いる。その底本は中外抄の上巻が宮内庁書陵部蔵本、下巻が前田育徳会尊経閣文庫蔵本、富家語は三条西家旧蔵本である。

### 二、希望表現の構成形式

中外抄・富家語における希望表現と認められる具体的な構成形式及びそれぞれの用例数は以下の通りである。なお

酒飲之後立<sup>テ</sup>欲歩之時、（立って歩こうとした時に、中外抄・下  
五七〇頁）

のように明らかに將然など他の意味での用法は、取り上げない。

中外抄

〔欲〕	(四例)
〔ムト思フ〕	(七例)
〔願〕	(八例)
〔祈〕	(一〇例)
〔請〕	(八例)
〔乞〕	(二例)
〔求〕	(一例)
〔ホシ〕	(一例)
〔バヤ〕	(三例)
〔マホシ〕	(一例)

富家語

〔ムト思フ〕	(一例)
〔望〕	(一例)
〔祈〕	(二例)
〔請〕	(一例)
〔乞〕	(一例)
〔求〕	(二例)
〔バヤ〕	(一例)

以上から見られるように、中外抄と富家語における希望表現の構成の最も明らかな差は、漢字表記形式の「欲」「願」及び和語形式の「バヤ」「マホシ」の使用状況である。即ち、中外抄において「欲」は四例、「願」は八例見られるが、富家語には見られない。和語形式の「バヤ」は両者に見られ、「マホシ」は中外抄に一例見られるが、富家語には見られない。

三、各形式の用法

1、「欲」「ムト思フ」の用法

まず、「欲」の用法を見る。希望表現を表す「欲」は中外抄に四例見られ、何れも漢文脈の部分における用例である。

(1) 大師尊貌を欲奉礼之心已及多年。 (中外抄・上 21 五五一頁)

(2) 而去夜夢欲奉礼大師は、可見仁海之由、有其告。仍参入也。云々

(中外抄・上 21 五五一頁)

(3) 東方築垣を壊之、如小松欲殖、如何。 (中外抄・上 59 五五六頁)

(4) 又観世音寺别当林実進上転法輪藏。欲進院如何。

(中外抄・上 77 五五八頁)

例(1)は「大師のご尊貌を礼し奉ろうと願う心が、既に多年に及んでいる。」例(2)は、「先の夜の夢に、大師を礼し奉ろうと願うならば仁海を見るべき由のお告があった。」の意<sup>5)</sup>、例(3)は「東方の築垣を壊して、小松などを植えようと思うが、いかがか。」の意と解され、何れも希望表現の下位分類の「願望」を「表出」するものである。例(4)は「院に奉ろうと思うが、いかがか。」の意と解され、主語は三人称で希望表現の下位分類の「願望」を「説明」するものである。

次に、「ムト思フ」の用法を見る。この形式は漢文表記ではなく、漢文の読み下し文脈に用いられるものである。中外抄に七例、富家語に一例見られる。

(5) 又仰云、我ハ三味堂ヲ立ムト思ナリ。(中外抄・下 24 五六五頁)

例(5)は、「私は、三味堂を立てようと思う。」の意と解され、希望表現の低位分類の「願望」を「表出」するものである。

(6) 此事をハ物に書付<sub>ト</sub>思食<sub>レ</sub>未書付也。(中外抄・上 52 五五五頁)

(7) 今日宮御方<sub>ニ</sub>拜礼<sub>シ</sub>立<sub>ト</sub>おもふ<sub>ニ</sub>、雪の降<sub>テ</sub>御前のけかれてえた、しかしと、(中外抄・下 29 五六六頁)

例(6)は、「このことを物に書き付けておこうとお思になるが、まだ書き付けていない。」の意、例(7)は、「今日、宮様の拜礼に行こうと思うが、」の意と解され、何れも過去の事柄について「しようと思うが、」できなかった。」の意味を表す用法。これは希望表現の低位分類の「願望」の「説明」に当たる。

(8) 院<sub>ハ</sub>隆覚<sub>ヲ</sub>なさんと思食<sub>ハ</sub>、無術事也。(中外抄・下 30 五六七頁)

(9) 院のなさんと思食<sub>人</sub>を令補御<sub>ヲ</sub>、春日大明神のなさせ給、おなし<sub>し</sub>ことにて可候也。(中外抄・下 30 五六七頁)

例(8)は、「院は隆覚を別当に当てようとお思になつておいでなので、」の意、例(9)は、「院が当てたいとお思いの人を」の意と解され、何れも三人称の「願望」を「説明」するものである。

(10) 頭中将<sub>ヲ</sub>召サント思給之間、家中<sub>ニ</sub>常召仕侍<sub>ヲ</sub>召テ候、奇怪第一事候<sub>ト</sub>咲給<sub>テ</sub>。(富家語 20 五七四頁)

中外抄・富家語における希望表現について

例(10)は富家語における用例であるが。「頭中将を呼ぼうとお思になつていたので、」の意と解され、これも「願望」の「説明」である。

右に見られるように、「欲」と「ムト思ふ」の表す意味が同じく、どちらも希望表現の低位分類の「願望」の意味であり、その「表出」か「説明」である。両者の差は主に漢文脈か読み下し文脈かという文体差から生まれる。

## 2、「願」の用法

先述したように、「願」の用例は中外抄に八例見られるが、富家語には見られない。中外抄のその用法を見る。

(11) 我<sub>ハ</sub>三味堂<sub>ヲ</sub>立ムト思ナリ。其願未遂。(中外抄・下 24 五六五頁)

(12) 而我<sub>ハ</sub>不遂件願遺恨也。(中外抄・下 24 五六六頁)

例(11)は、「私は、三味堂を立てようと思う。その願はまだ遂げない。」の意、例(12)は、「私はその願を遂げずにいることが遺恨だ。」の意と解され、これらの「願」は一人称の名詞用法である。

(13) 依此事御願成就、国土豊饒之由所伝承也。

(中外抄・下 36 五六九頁)

(14) 凡<sub>ハ</sub>神事<sub>ハ</sub>後朱雀院<sub>ノ</sub>久<sub>キ</sub>東宮<sub>ニ</sub>御願<sub>ナ</sub>との在けるにや、自其時くすしくなりたる也。(中外抄・下 45 五七〇頁)

例(13)は、「このことから御願の成就、国土の豊饒のことが伝えられ

ている。」の意、例(14)は「神事は、後朱雀院が長期にわたって東宮にあつて御願などがあり、」の意と解され、これらの「願」は高貴な人物に對して「御願」の形になる。

(15) 先年作興福寺願文持来。 (中外抄・上 82 五五九頁)

(16) 我鬢かきて着直衣、居簾中相逢願文讀了之後、 (中外抄・上 82 五五九頁)

例(15)、例(16)は、仏教用語の「願文」である。

このように、中外抄に見られる「願」「御願」「願文」の三種の形で用いられ、何れも名詞用法である。

### 3、「望」の用法

「望」は中外抄に見られず、富家語に一例見られる。

(17) 仰云、故殿ニ小鷹狩料ニ水干装束ヲ所望シ。 (富家語 36 五七五頁)

例(17)は、「故殿に小鷹狩の料として水干装束を所望したところ、」の意と解され、「所望」の形をとる実動詞用法である。

### 4、「祈」の用法

「祈」は中外抄に一〇例、富家語に二例見られる。

(18) 仰云、神社御祈時精進ハ、同日始ケル第一社ヲ例ニ依なり。

(中外抄・上 42 五五四頁)

(19) 又宇治殿御祈ニ頼豪阿闍梨參人ヲ、自宝殿妻戸衣袖指出たりけり。 (中外抄・上 71 五五八頁)

(20) 匡房カ病ニ公卿ヲ院モいのりをせさせ給はねはと被仰つるこそ、 (中外抄・下 30 五六七頁)

例(18)、例(19)は、「お祈り」の意、例(20)は平仮名表記されるが、何れも名詞用法である。

(21) 我祈申云、此家ヨリ后ヲ出立を見候ハ、やと申たりしに、 (中外抄・上 52 五五五頁)

(22) 御灯祓ハ、必可勤事也。為自祈也。 (中外抄・上 66 五五七頁)

(23) 朝仰云、魔事有ル人ハ、奉造五大尊、其腹中ニ大般若ヲ奉テ祈シ之時、魔事去云々。 (中外抄・下 57 五七二頁)

例(21)(22)(23)は、「祈る」の意と解され、何れも実動詞用法である。

(24) 夢見事は祈念し候とも、院の御遊免にも、長者夢ニも、寺僧夢ニも、見事かたく候。 (中外抄・下 30 五六七頁)

(25) 二月四日祈年祭者自朔日忌僧尼僻事也。 (中外抄・上 63 五五七頁)

例(24)は、「祈る」意と解され、「祈念」は熟語化した実動詞用法であ

る。例(25)は、「二月四日の祈年祭としひなまつりは、一日より僧尼を忌むことは僻事である。」の意と解され、固有名詞の用法である。

(26) 他祈ナトハ不被行。  
(富家語 39 五七六頁)

(27) 又別ニ祈レ祈レサリキ。  
(富家語 191 五八七頁)

右二例は富家語における用例である。例(26)は、「祈り」の意と解され、名詞用法である。例(27)は、「祈られなかった」の意と解され、これは実動詞用法である。

右から見られるように、「祈」の用法は名詞用法と実動詞用法である。

### 5 「請」の用法

「請」は中外抄に八例、富家語に一例見られる。

(28) 寿を小召テ、文の事を可援給之由、申請レ之。  
(中外抄・上 29 五五二頁)

(29) 如申請頼義をハ武者ニ令仕御テ、  
(中外抄・上 51 五五五頁)

例(28)は、「寿命を少し短くして、文の事を援けくださるよう、お願い申しあげた。」の意、例(29)は、「お願い申しあげたように、頼義を武者に任せさせて」の意と解され、「申請」の形で実動詞用法である。

(30) 故ハ、正月女叙位々記請印之後留御前内侍賦之。

(中外抄・下 5 五六二頁)

(31) 仰云、帝王御書請文ハ、礼紙二枚重テ其上ニ一枚ヲ卷、然者礼紙二重也。  
(富家語 162 五八五頁)

例(30)は、「故は、正月の女叙位には、位記、請印の後、御前に留め、内侍に賦ふ。」の意、例(31)は、「帝王への御書には、請文をば礼紙二枚を重ねてその上に一枚を巻く。しかれば、礼紙は二重なり。」の意と解され、「請印」「請文」は何れも特定の事象を表すもので、希望表現とは直接の関係がない。

### 6、「乞」の用法

「乞」は中外抄に二例、富家語に一例見られる。

(32) 仰云、可申主上、先例元服日ハ、乞五位藏人表衣天着之、四位時ニ乞藏人頭着之、  
(中外抄・上 15 五五〇頁)

(33) 但乞人給之、有何事乎。  
(富家語 227 五八九頁)

例(32)は、「先例は、元服の日には五位の藏人に表衣を願って着し、四位の時には藏人頭に願って着する。」の意、例(33)は、「但し、願う人には」の意と解され、これらの「乞」は実動詞用法である。

### 7、「求」の用法

「求」は中外抄に一例、富家語に二例見られる。

(34) 此牛ハ、祇園ニ誦経したりけるを求得たる也と被答けられ、

(中外抄・上 14 五五〇頁)

(35) 但余当初一兩度随求<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>之。  
 (富家語 216 五八八頁)

(36) 仰云、求<sub>レ</sub>恩報致<sub>レ</sub>忠節者、更可有<sub>レ</sub>報<sub>レ</sub>祿。  
 (富家語 250 五九〇頁)

例(34)は、「この牛は祇園に誦経料として奉納したものを求め手に入れた。」の意、例(35)は、「但し、私は昔一二回求め手に入れたので、」の意、例(36)は、「恩報を求めて忠節を致するならば、」の意と解され、何れも「求」の実動詞用法である。

#### 8、「ホシ」の用法

「ホシ」は中外抄に一例見られ、富家語に見られない。

(37) 匡房云、病者<sub>ハ</sub>、死期ちかくなりて、<sub>ハ</sub>物を食<sub>タリ</sub>。身付<sub>タル</sub>冥衆<sub>ト</sub>もの、物<sub>ヲ</sub>ほし<sub>カ</sub>る<sub>□</sub>候也。  
 (中外抄・下 30 五六七頁)

例(37)は「病者の身に付いた冥界の者どもが、物をほしがるのである。」の意と解され、「ホシ」に「ガル」の付いた形で他者の願望を説明する用法である。

#### 9、「バヤ」の用法

「バヤ」は中外抄に三例、富家語に一例見られる。

(38) 我祈申云、此家<sub>ヨリ</sub>后<sub>ノ</sub>出立を見候<sub>バヤ</sub>と申たりしに、先<sub>ニ</sub>皇太后宮令<sub>ヲ</sub>出立給。  
 (中外抄・上 52 五五五頁)

(39) 而廿二年故二条殿御事之後、大殿<sub>ノ</sub>令<sub>ヲ</sub>歎御<sub>ヲ</sub>見<sub>シ</sub>、あはれ我<sub>ハ</sub>彼人

様<sub>ニ</sub>成てみ<sub>タ</sub>たてまつら<sub>ハ</sub>やと思て、春日神<sub>ニ</sub>寿<sub>ヲ</sub>偏申<sub>テ</sub>遂本意<sub>ヲ</sub>了。

(中外抄・上 62 五五六頁)

(40) 範永か云<sub>ケル</sub>は、我今日出家をしてうせなは<sub>ヤ</sub>といひけり。

(中外抄・下 34 五六八頁)

(41) 宇治殿大極殿辰巳角壇上<sub>ニ</sub>御覽シテ、アレハ<sub>ハ</sub>伯人<sub>ニ</sub>ミセ<sub>ハ</sub>ヤト被仰<sub>ケリ</sub>。  
 (富家語 56 五七七頁)

例(38)は、「この家から後の出で立つのを拜見したい。」の意、例(39)は、「私は、亡くなった父のようになって、その姿をお見せしたいものだと思つて、」の意、例(40)は、「出家をして死にたいものだ。」の意、例(41)は、「高麗人に見せたい」の意と解され、何れも希望表現の下位分類の「願望」を直接「表出」する用例である。

#### 10、「マホシ」の用法

「マホシ」は中外抄に一例見られるが、富家語には見られない。

(42) 我等少年之時陪膳のせまほしかりしかは、不御坐之間<sub>ニ</sub>示家司<sub>ヲ</sub>相代<sub>ヲ</sub>勤也。  
 (中外抄・上 65 五五七頁)

例(42)は、「陪膳をしたかったので、」の意と解され、これは一人称の過去の「願望」を「説明」する用例である。

#### 四、おわりに

以上、中外抄・富家語における希望表現を考察してきた。両者共に元

関白藤原忠実の言談の記録であるが、筆録者も言談の時期も異なり内容・文体にも差があるため、その差がある程度希望表現にも反映される。しかし、両者の差は主に希望表現の構成に見られ、各構成形式の具体的用法にははっきりした差は認められない。

そもそも、希望表現とは「〜したい」「〜してほしい」という内心の希望を表す表現である。この観点で見れば中外抄・富家語において助動詞用法の「欲」とその読み下し形式「〜ムト思フ」、終助詞「バヤ」、助動詞「マホシ」は内心の希望を表すもので、希望表現の中核である。また、談話の記録という性格からか、他の希望表現についても比較的単純な表現であることがうかがわれる。「願」は何れも名詞用法であって助動詞用法が見られない。「祈」は名詞用法と実動詞用法が見られるが助動詞用法は見られない。その他の「望」「請」「乞」「求」は実動詞用法のみ見られる。これらの名詞用法・動詞用法の用例は希望表現とは関連性があるが、内心の希望を表す助動詞用法とは異なり、希望と関連する物事の名称や具体的動作を表し、あくまで希望表現の周辺的存在であるといえる。

### 【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第一部第109号』平成12年3月。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜た

い」の形で、「希求」は「〜してほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形式「一人称〜たい」「一人称〜してほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大辞典』第四卷、第五卷 岩波書店 一九八四年

(4) 山根對助・池上海一校注 『中外抄』『富家語』新日本古典文学大系 32 岩波書店 一九九七年六月

(5) 用例の解釈にはテキストの訓読文を参照した。以下同。

(しばたしろうじ 香川大学教育学部教授)  
(れんちゅうゆう 広島市立大学客員研究員)

(二〇一三年一月二九日受理)